



海外留学への展望 : 『留学ジャーナル』編集長

毛利章子氏へのインタビュー

Tim Newfields

ホテル・飲食業界専門誌、朝日新聞社(現朝日新聞出版)での雑誌編集、PR 会社の広報職を経て、2002 年(株)留学ジャーナルに入社。2009 年より『留学ジャーナル』編集長。このインタビューは、2016 年 5 月、電子メールによって行われた。

『留学ジャーナル』出版の歴史と背景を簡単に説明していただけますか？

1983 年に『留学ジャーナル』は創刊されました。会社としての創業は 1971 年で、当時の社名は(株)ICS 国際文化交流センター。ボランティアで留学相談をしていた団体が母体となっています。留学希望者の支援をする中、留学という言葉や意識、そしてどのようなものかを広めるため、雑誌『留学ジャーナル』は作られました。最初の版は中とじて、サイズもひと回り小さいものでした。社員が雑誌を抱えて、書店をまわって置いてもらうなどの苦労もありました。

その頃、1ドルは 300 円以上。留学は高額なもので、大学・大学院院留学が主流でした。創刊号では、当時、初めて語学留学を紹介し、アメリカとイギリスの語学学校・機関 168 校を掲載しました。日本の語学留学の普及には、当社がひと役買っているのではないかと、自負しています。

出版以来、『留学ジャーナル』がターゲットとする読者層は、どのように変化しましたか？

実は長年、留学ジャーナルのメインターゲットは変わっていません。18 歳～24 歳がメインの読者です。その理由としては、大学生と社会人3年未満くらいの方が最も留学をされるからです。大学生は長期間休みが取れやすく、留学に適した時間が最もある時期といっても過言ではありません。社会人は3年くらい働くと、次のステップを見据え、会社を辞めて留学する方が多くなります。

また、近年留学する層の年齢が広がりはじめ、高校生、そしてシニア層も増加しつつあります。そういった方に応えられる企画も、号によっては掲載しています。

多くの『留学ジャーナル』読者に共通する留学についての誤解は何ですか？

誤解、というより、よくあるのが留学への思い込みです。たとえば「留学でどこがもっとも人気の国か」とよく聞かれますが、語学留学なのか、大学留学なのかによって、傾向はまったく異なります。しかし、おそらく質問した方はひとつのイメージのみで質問されているのでしょう。留学にはさまざまなスタイルがあり、人気の国の傾向も、醍醐味もそれぞれ違います。それがまず知ってもらいたいことのひとつです。

また1、2週間からでも留学できることをご存じない方もいらっしゃいます。短期間でフレキシブルに留学できることがわかると、選択肢がぐっと増えると思います。

一部の国で区別されている「留学」と「海外インターンシップ」「海外ボランティア」の区別やその方法は、重要な情報ですか。『留学ジャーナル』では、これらに関する情報も提供されていますか。

「海外インターンシップ」と「海外ボランティア」は区別しています。基本的には、企業で無償で働き、その体験を将来の就職に生かそうとするのが「海外インターンシップ」です。仕事で役に立た



なければいけないため、語学力の基準も高めで、日本人にとっては比較的ハードルが高いものです。「ボランティア」は無償で働くという点においては一緒ですが、人道的支援が主眼になっており、応募できる基準にも幅があります。体験することで、すでに一定の目的は果たされるとも言えるでしょう。それぞれ、結果として得られるものも異なります。また日本においては就職時、人事から受ける評価も若干違う事もポイントのひとつです。

雑誌の中では、「留学」という言葉は、学校での学び、ワーキングホリデー、海外インターンシップ、海外ボランティアなどを含めた総括的な呼称として使用しています。『留学ジャーナル』は留学の専門誌なので、もちろんそれぞれの留学カテゴリーの違いについて解説したり、情報を提供したりしています。

日本人の留学傾向で気づくことは何ですか？毛利さんのご意見をお聞かせください。

留学の歴史の中で、最も大きな転換期は、1985年のプラザ合意です。NYのプラザホテルで行われたG5で、ドル安に向けての合意が発表されました。翌日から円相場が急騰し、その結果、留学もぐっと身近になったのです。

その後しばらく、留学層の増加傾向が続きます。1991年のバブルの終焉までは右肩あがり留学層も増え、「どこへ行っても日本人がいる」と言われました。この時代には「OL留学」も大流行。会社を辞めずに休みを利用して1~2週間の「プチ留学」で、英語+フラワーアレンジメントなど、本場のカルチャーを学んだりする「英語プラスα」に多くの方が参加しました。また思い切って会社を辞めて、人生を変えることを希望する方もたくさんいました。海外生活をしてみたい、という憧れだけで留学する人も多く、ワーキングホリデーに行くのも気軽。帰国後の就職の心配がなかったことも、後押ししていたと思います。

バブル終焉後も、しばらく留学層は増え続けましたが、学生の資金源である親の懐が厳しくなりはじめ、増加率は少しずつ鈍り始めました。文部科学省の統計でも日本の留學生数は2004年を最高値に下がり始めます。社会人も海外まで行くモチベーションを持つ人が少なくなりました。しかし、そんな中で逆に留学しようと志す人は、強い意志を持ち、きっぱりと前を向いて留学したい、と言い切っていたのも印象に残ります。

日本経済の低迷やドル高といった近直10年の変化はどうですか？

「気分」だけで留学する人は徐々に少なくなっていました。特に2008年のリーマンショック以降は、さらにガクンと減少します。しかし、今度は世界が変わり始めました。社会は次第にグローバル化し、企業は多国籍化、国内企業の売上比率も海外が多くを占めるようになってきたのです。今はどのような仕事をしていても、外国語ができたほうが多くのチャンスが広がります。海外の人と交渉できる人材を、企業が必要としてきました。そういった環境の変化を受け、国も体制を整え、文部科学省は2020年に向けた留學生倍增計画「トビタテ！留学Japan」を打ち出します。そして、ついに日本の留學生数は2014年に底を打ち、現在は上昇に向かい始めています。

そんな中、近年の動向としてあげられるのは、大学在学中の認定・休学留学をする層の増加です。そして低年齢層を中心とした留学年齢層の広がりです。認定留学は、ご存じかもしれませんが、各大学が提携する大学への留学です。単位が認定されるため、卒業が遅れることはありません。休学留学は、日本の大学を休学し、自分の望む学校に留学します。こちらは、卒業が遅れるのが通常ですが、語学学校を通じてインターンシップをしたり、大学のエクステンションでビジネスを学ぶなど、さまざまなことが体験できます。どちらも半年から1年近く行く方が多数を占めます。



低年齢層とは、高校生の留学の広がりです。高校生の場合は、短期間なら夏休みを利用してサマースクールに行ったり、高校生向けの語学学校に通うのがポピュラーな方法です。交流を主眼としており、語学学習＋アクティビティもふんだんにプログラムに盛り込まれています。もちろん、より多くの学びを求めて海外の高校に留学する層もいますし、卒業を目指す人もいます。高校生の中には驚くほど志が高く、自分が親を説得して YES と言わせる子もたくさんいます。

また子育てがひと段落し、憧れだった留学の夢を叶えるシニア層も、少しずつですが増加してきました。

『留学ジャーナル』以外の貴社の出版物についても、その特性を教えてくださいませんか？

『留学白書』は、毎年春に発表する、(株)留学ジャーナルによる留学生の動向調査です。前身として 1988 年より『留学 Report』というものがあり、『留学白書』という名前に変更されたのは 1991 年です。当社が直接アンケートをとった結果を中心とし、その他各国における留学生の動向調査もまとめています。渡航先、留学した理由、不安……など、ベーシックに調査するものに加え、その年ならではの質問項目を加えることもあります。数値で留学動向を読み解けるので、興味がある方には面白いのではないのでしょうか。たとえば、最初アメリカを考えていても、短期留学でも学生ビザを取得しなければならぬのならカナダに変更する、という層が毎年一定数でています※。またここ最近では、社会的環境の変化により、昔よりも留学を将来に生かしたいと考える真剣層が増えています。

(※日本人はアメリカで1週間に 18 時間以上の授業を履修する場合、たとえ1週間の留学でも学生ビザを取得することが必要となる)

貴社の『留学ジャーナル』は、他社の留学関係の出版物とどんな点で編集を異にしていますか？

近年、日本で留学に関する出版物は、単行本か、1～2年に1度発行するムックがほとんどです。『留学ジャーナル』には本誌と別冊がありますが、本誌に限っていえば、3ヵ月ごとに発行する定期刊行物であることが最も大きな特徴です。

したがって多くの出版物は大きなくりのテーマであることが多いのですが、『留学ジャーナル』ではもっと細かく特集テーマを決められます。「なりたい自分になる留学」「留学プランニング」「留学する国の選び方ガイド」など、その時々で留学する人の心情にできるだけ添った内容を作ることができるのです。また雑誌である以上見た目も大切に、堅苦しい内容をいかに楽しく見てもらえるかにも配慮しています。「留学」という真面目なイメージ以上に、我々の雑誌はカラフルで、イラストも満載です。

あなたは、留学を考えている学生にどんなアドバイスをしますか？

まずはどんなに短期でもいいので、一度は海外留学をしてみてください、ということです。今はネットに情報が溢れ、必要な知識には事欠きません。しかし、頭で考えるのと実際に体験するのは、感じ方がまったく異なります。

留学を考える方に、なぜそう思ったのかを聞くと、留学した先で何かが変わることへの期待感、海外の方とコミュニケーションをとれるようになりたい、などを理由にあげる方が多くいらっしゃいます。背景にある心のドラマはそれぞれだと思いますが、留学を志す方は、そのように何かを変えたいの



だと思います。英語が話せるようになりたい、もっと知識を増やしたい、国際性を養いたい、積極的になりたい、今の環境や慣習に疑問があるので違った場所で暮らしてみたい……。海外に行くこ

とはあえてアウェイの状態に自分を追い込むことではありますが、最初は苦労があっても、それを乗り越えると、期待通り必ずや視野が大きく広がる体験ができるでしょう。

留学は、そのきっかけをくれると同時に、チャンスがあればそれを掴もうとする勇気もくれます。いま何かを変えたいと思うなら、ぜひためらわずに世界に飛び立ってください。

最後に、多くの日本人は、留学経験を持つ芸能人に興味を持ちます。芸能人は流行の仕掛け人です。私は、トークショーのホスト役を務める黒柳徹子が1971年にニューヨーク市のメアリーTarcaiスタジオで演技を勉強した事を思い出します。海外留学経験のある有名な芸能人は、他にもいらっしゃいますか。

たくさんいらっしゃいます。どなたを挙げたらいいのか迷うほどですが、タレントで、留学ジャーナルの表紙にもなっていたいただいた関根麻里さんはエマーソン大学を主席で卒業しています。歌手の宇多田ヒカルは退学されましたが、飛び級でコロンビア大学に入学したのは有名なエピソードです。松田翔太さんはイギリスに留学。仕事の合間に公表せずに密かに留学している方も、実は大勢いらっしゃいます。

参考文献

留学ジャーナル (2016年) 『留学白書』 東京: 留学ジャーナル

記事募集

求む記事内容: インタビュー、意見、授業アイデア、
海外留学に関する本や論文のレビュー、
ジャーナルのための記事は、
いつでも募集しております。
当ジャーナルの共同編集長宛に、
studyabroadsig@gmail.com
アドレスまで、お問い合わせください。

詳細な出版ガイドラインは、
<http://jalt-sa.org/guide.htm>
をご覧ください。

Articles Sought

Articles, interviews, opinion pieces, classroom ideas, and book or text reviews related to study abroad are welcome on an ongoing basis for our journal.

Please contact our publications co-chairs at this address:

studyabroadsig@gmail.com

Detailed publication guidelines are also online at

<http://jalt-sa.org/guide.htm>